

1300年祭の「目玉」いよいよ

平城宮跡へ搬入、復元

遣唐使船の 迫力を今へ

来年1月1日開幕の平城遷都1300年祭の主会場、平城宮跡会場（奈良市、開催期間4月24日～11月7日）の呼び物の一つ、実物の遣唐使船の船体の搬入と復元組立作業が17日始まった。

遣唐使船は長さ30㍎、幅8㍎（櫓棚を合わせた）と約10㍎。2本の帆柱を持ち、主に県産の吉野杉などを使って建造。1300年記念事業協会が約2億円をかけ、静岡県岡

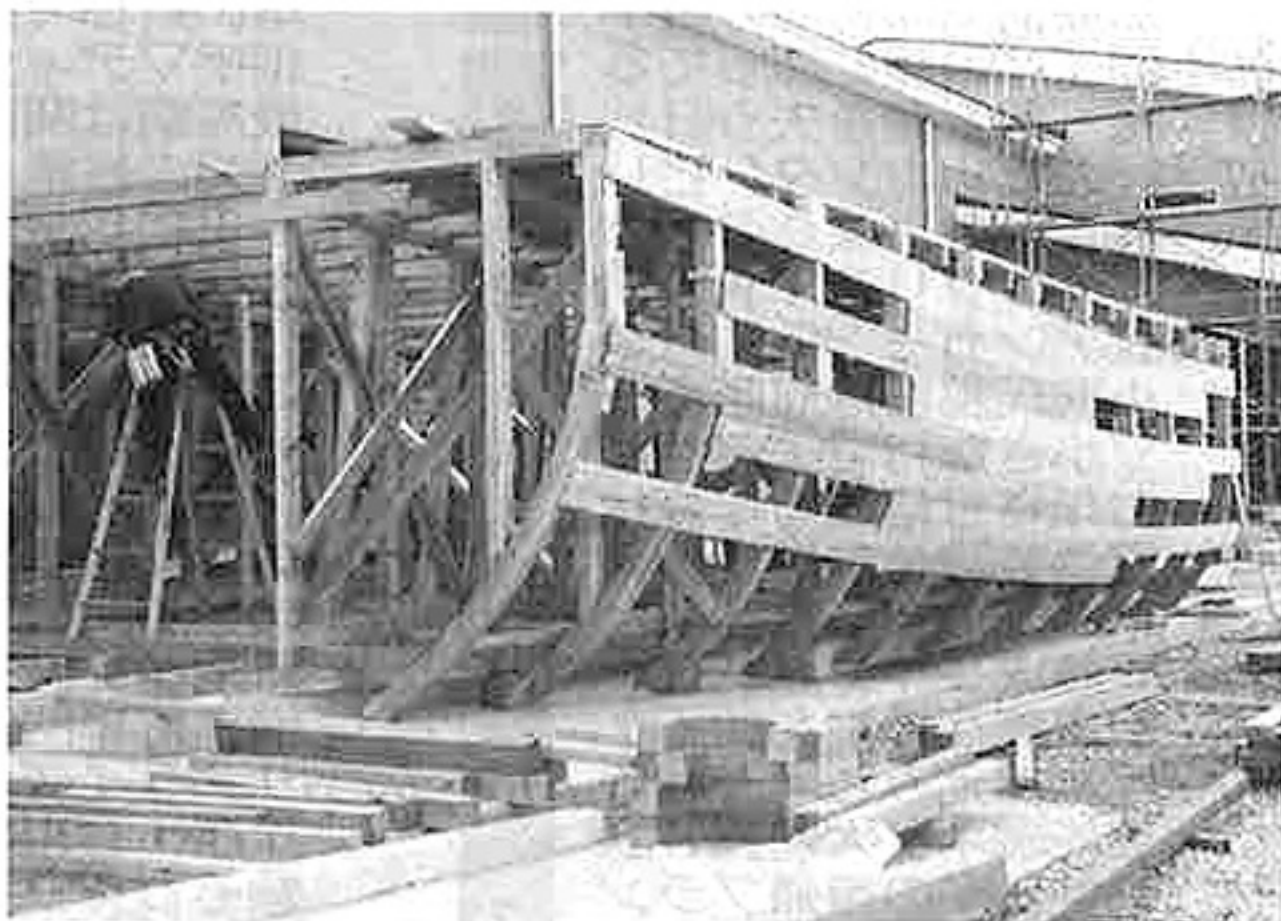
村造船所で製造した。搬入第一陣は同日午前8時ごろ、船尾に近い船体の一部（長さ約9㍎、幅8㍎）がトレーラー2台で到着。クレーンで荷降ろしし、展示施設「平城京歴史館」北側で作業員8人による復元作業が始まった。

搬入は19日で終了。船体部分の組み立てを年内に終えて、甲板の屋形や帆柱など全体が組み上がるのは来年3月中旬を見込む。

史料が乏しい遣唐使船の復元は、古代船の研究家を交えて設計が検討され、平安時代の絵巻物「吉備大臣入唐絵巻」なども参考に完成させた。遣唐使船へは「歴史館」に入館し甲板への乗船体験も楽

しめる。

1300年記念事業協会の浅田輝男さんは「外洋に乗り出して中国まで往復した船。遣唐使が命懸けで大陸の文化を吸収したことを感じてもらえれば」と話した。



平城宮跡内で復元作業が始まった遣唐使船＝17日、奈良市の「平城京歴史館」建設現場